

# メモリー/ベイ

佐々木 保典

これは、夢の話だ。

僕の夢。あなたの夢。もしかしたらもっと別の誰かの夢。いくつもの夢が梯子のようにつながってどこか遠いところに伸びきっている。だから彼女もそう言ったのかもしれない。

「ホテルヒルベルトをご存知かしら」

いいえ。

「限りの無い部屋を所有するホテルのことよ」

それから彼女が話した内容はよくわからない。なんでも無限の個室と無限の宿泊客、一組の宿泊客が来るたびに、部屋を移ることで、無限が拡張されていく様子を説明できる。

僕は、わざわざ客が来るたびに部屋を移らなければいけないホテルは接客業としていかなものか、と思ったし、新しくやってきた宿泊客との諍いも絶えることはなく、ついでにいえば無限に遠くなった部屋で、いつになったらホテルから出られるかもわかったものではない、など、くだらないことを考えていた。

美しい彼女の黒髪も、無限にあるように見える。そんなはずはないのだけれど、そう感じる。

僕たちは、環状線路を走る電車の中にいるようだ。ときおり駅へ到着したことを告げるアナウンスが流れる。駅名は、モザイクがかかったみたいに聞き取れない。扉は開く。誰も乗りこまないのに、なにかの定石の通りに、開いては閉じる。

「同じ景色が繰り返されているとおもうでしょう」

いつのまにか、乗客だけは増えている。減ることはなく、増えるのみだが、なぜだか密度は一定だ。

「ちょっとちがうのよ」

彼女の微笑の意味は、僕にはわからない。車窓の外は暗い夜の街だ。線路は高架になっている。シルエットになったビル群は無数で、ネオンが溢れては流れ、光の帯が七色のままたなびいて薄く消える。どこにでもありそうな首都圏の光景で、誰もが見覚えのある家電量販店の屋号も見える。

「すこしずつ、この電車は、ずれていくわ」

僕たちは座りもせず、電車の通路に立ったまま、会話を続ける。

「ずれる」

「ええ、そう。わたしたちはゆっくり時間をかけて、この都市の中心に向け落ちていくの」 それは、かなしい出来事だ。

「かなしいですって？都市の中心には重力が生まれるのよ。いつだって生まれて始まることは尊く清い」

「でもこの列車はいずれ落ちて消える」

「いずれね」

まさか、線路まで収縮しているわけではない。彼女のことばが戯れ言だ。言葉の本身から生まれたものではあるまい。

「乗客も落ちていくの」

「ええ、あなたも」

「君は？君は消えていかないの」

彼女の口が僕に向かって開く。口紅の中でネオンが跳ねる。

「わたしは、消えないわ」

「どうして」

「どうしても。わたしが消えると、誰も舟を作ることができない」

「それは理由にならない」

「どうして」

「『舟を作ること』と『君の消滅』には因果関係がない。だれかが、君の能力を恃むせいで、君の消滅を妨げている、ということなら納得はできる。理解はできそうもないけど」

「理屈が好きなのね」

「ああ、おかげで妻にも逃げられた。手紙もなかった」

僕ははたと気づいて、彼女に顔を向けた。

「もしかして、ここはそんな人間が最後に来るところなのか」

僕は、妻を待ち続けた日々を思い出していた。あの日常に理由が欲しかった。どことなく妻の面影がある彼女は、進行方向に向き直った。指を伸ばす。その指には見覚えがない。所作のすみずみから、妻とは異質であると叫ばれているようだ。

彼女の指先には魔法でもあるようで、前の車両が透けて、四人掛ボックス席にひとりで座る西洋人が突然あらわれた。

「かれは、ジュリアーノ。冷凍睡眠財団の経理顧問だったけれど、先日回顧されたばかり」

「冷凍睡眠財団？冷凍睡眠ってあれか、コールドスリープ」

「ええ。眠っている間に世界に進化してもらって、長生きのコツをつかめる機会が増えるのを待つ最高の他人任せよ。かれは財団の資金運営に失敗したの」

「そんな財団にどんな資金があるっていうんだ」

「眠っている間、だれがお金を支払うとおもう」

「さあ。前払いなんじゃないのか」

「いつまで眠るかわからないのに、それだと相互に納得できないでしょう」

まあ、たしかに。金が切られたついでに生命維持装置のチューブが外れるなんて事故は簡単に起きそうだ。

「資金は投資で回収される。管理者としての彼は、一部の安定した信託資金の一部を第三国の通貨市場に投資し、見事に資産を蒸発させて解雇された」

「悪いのは彼かしら」

当然だろう。

でも、妻が逃げたのは誰のせいだ。

「——僕だ」

だって、これは己の夢の話だ。こんな夢を作り上げた俺が悪いに違いないのだ。

女の手が僕の髪に触れた。

「怖がらないで。過ぎ去ったことはいつも曖昧だわ」

そんなことあるもんか。彼女の作った料理の味は鮮明に覚えている。小魚をこれでもかと鍋に投げ入れる癖、作りかけてあきらめた無数のケーキ群。妻と過ごした日々そのもの。いつ。どこで。彼女のハンチング帽が地に落ち。誰かが拾って。そうあれが何日かも正確に――。

「――正確に」

僕は思わず、手のひらを眺めていた。そして意味もなく動く視線に戸惑った。

「そう、正確に覚えすぎている」

「どうして」

彼女を向く。彼女の顔は白すぎて、窓の外からの光を正確に反射するようだ。磁器の白。透けていく白。

「人の記憶は物理量的一种だから」

光のいくつかが車窓の外で定期的に明滅する。

「記憶をコントロールすることはできる」

「そんな、僕だけの、これは僕と妻だけの記憶だ」

「人は忘れていくわ。忘れられた記憶は、本人には知覚できないだけで、物理量として保存される」

「ああ、つまりこれは僕の記憶そのものなのか」

「この電車は、舟、と呼ばれているわ」

カーブにさしかかって連結器が軋んだ音がする。車体が波を打ってうねり、衝撃がふたりの足もとに達した。とっさに彼女の手を取った。妻のコットンのように、きめの細かい肌だった。

「座りましょう」

車内販売から飲み物を買ったふたりは、ふたつのボックス席に別れて座った。両手に挟んだカップの中にはコーヒーが満たされている。湯気のちいさい粒子がほどけて散った。

「夢の話だとおもって聞いておくけれども」

「ええ。どうぞ」

「どうして、記憶にかたちを与えたんだ」

カップの中のコーヒーは、温かかった。どうしてだろう。その理由が今はわからない。ホットコーヒーを頼んでホットでなかったことなどない。でも、それはどうしてだろう。いや、どうしてだっただろう。もしかしたら、ものすごく簡単なことで当然のことだったかもしれない。だが、それがなぜか、いまはもうわからない。

「かたちさえなければ――」

指を動かしてみる。小指と親指の腹をこすりつける。温かい皮膚が、しかし、脂をうしなって乾いていた。

「こんなに哀しまずにすんだ」

昔、僕はギターを弾いていた。Cコード、D、A、Fといくつか指を空に描いていく。

「あなたはまず、理由を聞いた。最初に方法を尋ねる人もいるのに」

「それが、どうしたっていうんだ」

持ち直した紙カップの縁は力をかけると、鋭角に折れた。

ちいさな笑みが、彼女の口元に滲んだ。困ったようにも見えた。

「記憶の再生技術は、ある機関の手段のひとつとして、特異的に進歩を遂げました」

「ある機関？」

「司法よ」

よく見ると、彼女は黒のノースリーブを着て、黒いレースの手袋をしていた。レースに電飾がある。ちらちらとよく光る。

「事実がはっきりしていればすぐに解決する係争案件は、いくらでもある。司法労力の簡素化にもっとも貢献できると判断されたのが、記憶の再生なの」

「もっとも端的に言うと、どうなる」

「あなたの奥様が離婚調停を申請している」

「ああ、知っている。裁判所から督促状が届いた」

「その申請に合わせて、あなたの記憶のサルベージ要求が出たのよ」

「本人に無申告に、か」

空しい発言をした。そう思った。彼女はそれを補完するように、

「ご本人は——」

といった。皆まで言うまえに、僕の右手が彼女のことばを遮った。

また、列車は駅に止まり、そして再度動きはじめる。見知らぬ他人が、いつの間にか何人も乗り込んで所在なげに窓の外を見ている。

「記憶はコントロールできる、といったな」

「ええ」

「そんなものを司法判断に使っていいのか。信用できる情報とは、とうてい思うことができない」

「語弊があったわね。コントロールできるのは、吸い出しだけなの。同じ質問をされることは多いので、私たちは電車のたとえを使うのだけれど」

いかしら、と女は言ってメモ用紙を取り出した。鉛筆がどこからともなく彼女の手の中に落ちた。HBの。なつかしい。

「なつかしい？」

ふいに言葉がもれた。そうだ、僕らの時代に鉛筆なんか無かった。女は怪訝そうに僕を見たあと、肩をすくめて、

「記憶は、つながっているわ」

というのだ。

「他の人と」

「そう、あなたとは別のだれかの」

「気持ち悪いことだな。まるで、アカシックレコードだ。オカルトじゃないか」

「あら、すてきなことじゃない」

「そう言えと、プログラムされているのか」

女がかなしそうな目をしたので、僕は目を逸らした。

なにか美しいものの影が、おそるべき早さで後方にとんでいく。遮音壁らしい灰色の壁はずっとモザイクがかかったように輪郭が曖昧だ。ブラックの描くキュビズムの絵画のような。落ちていく、降り重なって。

時間のきしみゆく音に耐えがたくなって、彼女を向きなおる。愕然とする。

「悪い冗談はやめろ」

黒い蝶タイが妖しくさざめく。白いブラウス、紺色のフレンチスリーブを好んで着ていた。妻だ。名前を呼ぶ。いくつもの解像度の悪い響きが重なって正確に発音できない。だれかの記憶がまとわりついているんだ。

——ああ、その瞳はもうたくさんだ。

わかっている、悪かった、悪いのは俺だという、声のない無数の懺悔が今度は僕の感覚の中に蠢いて、叫んでのたうちまわり——そして、消えた。

からだ荒い息をしていた。欲望はかりそめながら、動悸の音さえ聞こえた。

「ごめんなさい」

怒りが隆起して興り、罵りのことばになって口からこぼれだそうとした矢先に、気持ちが急に冷えた。

「いや——君の、やりたいことがわかったよ。つまり、この感情も歴史の堆積物なんだな」

眉尻を下げたまま、彼女はちいさく微笑んだ。

気づくと手もとにメモがあった。棒人間のまわりに膜のようなものが描かれている。

「過去の記憶は、そうやって人にまとわりついているの」

女は言いながら、細い煙草に火をつけた。葉が燃える赤光だけが、窓にうつる。燃焼の度合いが時間の中を、ひらひらながれて落ちて。灰色の情念が遺る。

「記憶を吸着して、情報量に変換する理論は高度の機密管理がされているので、一般的ではないけれど」

はき出したうすい紫の煙が、渦を巻いて彼女の顎の下から髪の毛を通過していく。

「その情報には不可分のものが含まれる。外部からの刺激で意図を込めようとすると、記憶情報全体が連続して変化してしまう。ちょうど列車の一部が脱線すると、他の客車が釣られてしまうように。だから、どうしてもすくい上げられた記憶に印象を付与することはできないのよ」

「記憶は本人の意志とは無関係に書き換えられると聞いたこともある。結局、そいつがどう思っていたかがわかるだけで、それが事実だとはかぎらないじゃないか」

「逆よ。わたしたちは事実が欲しいわけじゃない。むしろ、あのとき、あなたがどう思っていたのか、そのものだけが大事なのよ」

コーヒーは冷めていた。命がてのひらのなかで途絶えたようだった。熱量は周囲に向けて均一に散乱し、エントロピーは増大するばかりで、つまり取り返ししようがない。

いくつかの駅が通り過ぎ、乗客は乗り込んで拡散し、車内販売は進行方向から何度もやってくるばかりでけして戻っては来なかった。あらゆるものはどこかから来て、どこかへと去って行く、無限にあるホテルの客室のように。

「僕になにが聞きたい」

彼女は応えない。

水膜に覆われた瞳の輪郭がいくつものかたちにぼやけ、都市の光を飲み込んで、はじく。

僕は、ふかく息をついた。

——そうだ。彼女の意図には、ずっと前から気づいていたのだ。

だれからも責められることなどないと、ひそかに思いたかっただけだ。

「僕が、彼女を殺すんだな」

警笛が、けたたましく鳴った。いままで一度も走らなかった反対車線の列車が、光の奔流になって駆け抜けた。耳をつんざいたのは、誰かの悲鳴だったのかもしれない。

「カノープス」

彼女は実に対照的に、ちいさな声でつぶやいた。

「わたしたちは、人工的な記憶蘇生を〈カノープス〉という装置を通しておこなう。ひきはがした記憶を吸着させ、量子化し解析し、人格としてあなたのように再構築する。再構築するとき、どの時間のあなたから貴方をつくりあげるかは、コントロールすることができる」

紙カップはくしゃくしゃになってしまった。円かった縁は可能なかぎりの折り目が試されて、谷や山になった。

「いつでもすこし前のあなたが、貴方自身の水先案内をするわ」

涙が頬を落ちた。取り返しのつかない事実から逃れるために、手にちからをいれても、もはやどうにもならない。

「いまのあなたは、離婚調停が提出されてから、彼女に手を掛ける前までの記憶で構築されている」

「現実の世界では、どうなっているんだ」

できるだけ静かに、僕はカップを床に置いた。途端にカーブにさしかかり、慣性力でカップは倒れ、未知の方角に進む。

「残念ね、あなたにそれを知ることはできない。知らせられないのではないの。もっと物理的に——ただ、無理なのよ」

理屈は頭の中で鋭く踊る。正論は硬膜のなかで跳ね返って、前頭葉を刺激し、刃となった言葉が相手への殺意になる。が、ここでは記憶は蓄積されえない。落とし込む先がないのならば、手もとに残しておくほうが粹というものだ。そうじゃないか。

ふたつの掌で瞳を覆う。

「ああ」

両手は存外、あたたかかった。ずっと前に冷えていたと思ったのに。

胸のなかに概算された妻への気持ち、乱雑に蠢いた。

「謝罪の言葉を投げかけたいけれど、対象がどこにもいない、そのつらさは私にもわかるわ。謝ることで解消できる心情があるもの。きっと大勢の人が、あなたに共感してくる。でも、あなたはそれまで奥さんにいったいどんなことを感じていたのか、教えてほしいの」

僕は、記憶のツテをひとつずつ引き上げた。抜錨するような気さえしたが、どちらかというところ、浴槽の栓を抜いているという形容が近いのかもしれない。積み重なった湯がなくなれば、そこ

は用をなさない。錨を上げてどこかへ向かうのとはちがう。水頭がうしなわれれば、空間が広がるだけだ。

妻への感情。他人の情念をよりわけて、自分の声にする。出会った頃にいただいた気持ち、結婚式のこと、子どものこと、生活のこと。だれかへの悪意や、嫌悪への対処。僕は理を語り、彼女は情を請うた。うとましくおもった。僕無しでは生きていけないと思った。

だから、だからだから。

扉を開いて。また閉じて。やがて、降り積もった記憶が底をついた。

「それで、全部なのね」

「ああ」

「あなたは、彼女が好きだった。好きだったから、その手でどうにかしたかった」

「——ああ」

「他にはなにも、言うことはないのね」

「わかっているんだろう。舟を扱う君には」

「ええ、わたしたちはいつでもどこかから来て、かならず、どこかへとたどり着くもの。旅程を知るなんてたやすいことだわ」

こんな俺もどこかにたどり着けるのか。

「ええ、もちろん」

列車は減速を始める。どこかの駅にまた、到着するのだ。

「最後にもうひとつ、聞かせて欲しいの」

おれも聞きたいね。このからだはどこに行く。

「そのまえに——」

線路のつなぎ目から、空隙音が消えた。車体が完全に停止し、駅の名前がアナウンスされる。今度は、はっきりと聞こえる。この名前は。

「うそだろ」

暮らしの彩りが、視覚によみがえる。いつも僕が乗降車していた駅だ。おもわず腰を浮かせて、車窓の外を眺める。乗客が昇降口に駆け寄る。その中に白いミュールが見えた。二回目の結婚記念日に、僕が彼女に贈ったのだ。ミュールの紐は細く、妻の、紅くなりやすい皮膚に食い入った。その皮膚の色相反転に僕は見とれた。毛細血管がつぶれ、皮膚内部で浸潤する。

わかっている、これが僕の記憶が創りだした幻だろうと。かつて同じ景色を見たのだ。はっきりとわかる。しかし、それがいま、目の前で作り直されている。その体験で十分代価は取れている。

「——結局ね」

どこか遠い国から、〈カノープス〉がつぶやく。エコー、エコー、ドップラー。

「司法判断には記憶は利用されなかった。むしろ、どちらかといえば、争いを続ける両者のケアに使用されることが増えた。そもそも事実はどうであれ、お互いの心情を知ること、係争をやめるケースが有意的に増加したの」

妻に見とれた。



「だいじょうぶ、彼女の死に、あなたは関係していない。たまたま、列車事故に巻き込まれただけよ」

僕は、妻の手をとり。

情報の欠如した音だけが、ぼくらの廻りに走る。

あの女は、どこにもいない。

あの女とは、なんだ。

扉が閉じて動輪がきしみを上げ、車両はまた環状に走り始める。

そして。

男の声は、反対方面への電車の音にかき消されたが、モニタにはしっかりと残った。

私はつらつらとエディタにテキストを並べる。

——そして、あなたはどこまでも落ちていく。

「もう、聞こえないでしょうけれど」

モニタ上にはウィジェットとして、同期されたバイタルデータが踊る。鼓動がおさまり、脳波も落ち着いた。

「どう」

答えはわかっていたので、私はBGMを止めた。どうもこういうポップスは苦手だ。

「ええ、おそらく。もう大丈夫でしょう。こうなってから、サバイブしなかった人はいませんので」

「そう。それは、よかった」

春の風が、南向きの個室のなかに吹き込み、淡く輝く白いパンプスの紐が揺れた。

「わたしにはすこしも納得できません。離婚にまで追い込んだ夫の死を、こんなにも嘆いて、あげく、自分のせいだと思い込むだなんて」

栗色の毛を桃色の髪留めでたばねた助手は、食い入るようにモニタを見つめている。

「そうね。それに、すこし薄情だとも思うわ。生前の記憶を読み入れるだけで、すなおに自分が悪くなかったなんて信じられるなんて。よほど、愛されていた自分のことが好きだったのね」

「そろそろ聞こえますよ、主任」

「あら、でもそうでしょう。こうして見せてあげられる記憶は、亡くなった彼のからだから再生されたものよ。それがどうして真実だなんていえるのかしら。プラセボじゃないとだれが言い切れるの」

「わたしたち以外には、無理かもしれませんね」

「なんなら、ぐちゃぐちゃになった彼を見せてあげればいいのよ。恋愛の価値がわかるわ」

「それには賛同できませんがね」

助手はキーを叩き、〈カノープス〉の実装された端末でウィンドウを拡げる。バックグラウンドで動き続けるのは、彼女が書いたスクリプトだ。〈カノープス〉の実行時間とともに、都内の数カ所に設置された重力測定器の読み込み値が並べられている。私たちが常駐するこの研究所を中心に、計測器は距離を置いて設置されている。値のズレを確認するためだ。もちろん、この部屋

にもある。

「やっぱり、質量、変わっています」

「計測誤差の可能性は、どの程度」

「旧来のバネ式がずいぶんあるので、なんとも。それでも、十分有意に見えます」

いくつかのロードセルは短時間に大きく振れていた。予算の都合で、防振設計できなかった箇所だが、最低値はリファレンスモデルにくらべて高くなっている。他の重力計も、計測精度をあざわらうような値を叩いていて、解像度を粗くするしかなかった。

つまり、私たちの予想は、はるかに超えた。

「記憶と重力、あるいは質量そのものの間に、なんらかの関係があるのは間違いないとおもう。〈カノープス〉を使ったときにできる記憶の抜け殻を補完するために、エネルギーが使われているのかもしれない」

これはきっちり把握しておかないと、やっかいなことになる。できれば、絶対測定をしてみたいと、私は思った。

「この間の山手線事故、原因はわかっていないけれど、主任はなにか関連があると思いますか」

「信じられないことだけれど十分に。人口密度と、記憶再生にも関連があるんじゃないかしら。環状線のイメージは、かなり多くの患者に見られる共通の像だし。ほんとは、はっきりするまで記憶再生なんてやめてしまえばいいのだけれど」

「こんなにカジュアルにやられると、それも無理ですね」

ラップトップをぱたりを閉じると、助手は眼鏡をぐいっと上げた。手入れしていない眉毛に、汗が溜まるのだ。換気はしても、機材の熱量に負けて部屋の気温は上昇し続ける。

彼女はおもむろに片付けを始めた。気づくと、与えられた時間にもうすぐ届いてしまう。担当医に患者を返すしかない。助手には、没頭する自意識を外から眺めるタイムキーパーがいるようで、とにかく時間の取りこぼしが無いのだ。うらやましい、と私は自分を嘆く。

患者は、浅い睡眠に移行している。この部屋に入る前、鎮静剤を打たれた直後の狼狽ぶりとは大違いだった。

「主任は、なにを聞こうとしたんです」

「なにして」

「ほら、聞きかけたじゃないですか」

「ああ——」

私は、はためくカーテンを抑えながら、応える。たいして興味深くもなく、誰にでも聞いてみたいものではないが、ひどく個人的なものだ。

「結婚て、そんなにいいものかしら」

助手はぼかんと口を開けた。

「公費を使って、そんなことを」

「あなたも共感できるでしょう」

彼女は、肩をすくめてため息をついた。

「——わたし、婚約したってお伝えしたでしょう」

絶句。

「うそ」

「主任は、ご自身の記憶をしっかり管理した方がよろしい」

ジュラルミンのケースを両手でしっかりと抱えた彼女は、満面で笑った。

「今回の件は、夫婦円満の参考にさせていただきます」

と、言って。

そして私も。

どこまでも落ちていく。